Ｌｅ　Ｓｅｍｅｕｒ

〔ル スメール〕＝種をまく人
【教育相談】の種をまく人でありたい/子どもの心に
【愛の種】をまきたい/自分の心に【ゆとりの種】をまきたい

日本学校教育相談学会山梨県支部 会報発行
2021年度 No.6　１月31日
発行者 山梨県支部事務局
発行所 北杜市長坂町中丸4333-16
メール　kyouikusoudan.y@gmail.com

第6回研修会　チームで取り組む教育相談 -SCとの効果的な連携-

今回の研修会は、学校現場で大きなテーマになっているチーム学校、さらには、チーム支援、そして特にスクールカウンセラー（以下、ＳＣと略します）との連携をテーマに、令和４年１月22日（土）コロナ禍が続く中、参集での実施を中止して、Zoomのオンラインで行いました。

この研修会は本学会山梨県支部にとって２つの「初めて」がありました。１つは臨床心理士（ＳＣ）と初めてのコラボ。もう１つは、初めてのオンライン研修です。

１　臨床心理士（ＳＣ）との初めてのコラボ

山梨県臨床心理士会学校臨床心理委員会の役員でありＳＣ経験も豊富な石原香絵先生（公認心理師、臨床心理士）をお迎えてしお話をいただきました。また、臨床心理士（ＳＣ）の方が数名参加してくださいました。

もともと2020年の３月ぐらいに石原香絵先生から教員の教育相談の会と連携したいという話があり、実現しようとしたところ、コロナ問題が出て中断するような状況が続いていました。やっと今回それが実現した次第です。

２　スクールカウンセラーとして感じる学校現場の課題（概要です、詳しくはレジュメを）

石原先生からは、ＳＣとして働く中で感じる、学校の教育相談や支援の疑問を、以下のような感じで、率直に提示してもらいました。

・学校はＳＣにとってアウェーであり過酷な現場であること。
・一方で、学校は医療・福祉領域にもひっかかってこない最底辺の子どもに初期対応できる最前線であること。
・児童生徒のカウンセリングの前（０期）の関わりが大事であるが、教員等との連携がうまくいかない事例（カウンセリングに来る児童生徒の情報交換や共有がうまくなされない場合）があること
・ＳＣと教員がうまくいっている時はその学校の相談支援がうまくいっている、ＳＣと教員の関係が普通にできていることが大事であること
・相談や相談室の在り方が大事にされる学校は児童生徒にとっていごこちのよい学校であること
・定期的な学校での支援の会議が毎回状況報告にとどまることがもったいないこと　等々

３　教員からの相次ぐ質問

こうした石原先生のＳＣの活用をめぐる問題提起的な提言に、教員から質問が相次ぎました。

それらは、ＳＣと担任等との情報交換がうまくいっていない問題、ＳＣや教員が受容共感的対応をする中で、児童生徒の問題解決、課題改善の働きかけはどうするかという問題、さらには、ＳＣの活用の仕方そのものが現場に丸投げされ、具体的な方法ややり方が学校に提示されていない問題などに関わることでした。さらに、それは教員がどのようにコーディネーションしていくかという問題に絡んでいることになり、後半の佐野の話に続きました。

４　教員のコーディネーターとして学校でＳＣとどう連携していくか

そこで後半は佐野の方でコーディネーターについての以下の話をしました。

①学校には正式に特別支援や教育相談のコーディネーターを置かねばならず、それらがしっかり機能することで、石原ＳＣが提示した課題を乗り越えていけること
②コーディネーターの機能は、正式なコーディネーター以外に、担任、主任、管理職などそれぞれの立場でやっていくこと。そして、それはＳＣや関係職員の対話の促進をしていくことが中心となること。
③ＳＣとの情報交換はＳＣ，担任、コーディネーターなど３人以上ですることで自然とチームが発生すること。ＳＣを活用することで、チームを作り安くなること。
④ケース会議（支援会議）は、具体的にどう支援しどう役割分担をするかということを話題にすること。その場合当面の短期目標（スモールステップ目標）を明確にして関係者で一致されることが大切なこと。

５　まとめ

本学会に所属しているような教育相談専門の教員の役割として、自らも児童生徒に相談支援的に接するとともに、ＳＣと他の教員をつなぐ役割が一層大事になっていくこと。そのような意味で今回、石原ＳＣに、問題提起していただき、時間は足りなかったのですが、本音の率直なＳＣと教員の意見交換ができたことは有意義だったと考える。ただ、一方で、こうしたチーム学校や連携のための有効な研修の機会が少ないこと、今後はＳＳＷの活用も含めて研修会が必要だということになりました。

またオンライン実施については、下の感想にあるように、メリットと課題があるので、また議論や検討をしていければと思います

研修会参加者の感想（要約して掲載します）

〇スクールカウンセラーとコーディネーターの両者の視点からお話が聞けてよかったです。

〇それぞれの立場にとって日常的には得がたい貴重な意見が聞けたのではないか。今後の勤務に生かされることを期待する。

〇石原先生のお話はとても勉強になりました。コロナ期にSCになり右も左もわからず、教員でも、臨床心理士でもない私（ダブルにアウェー）が感じていた事、また2年目に思っていた事と重なる部分がたくさんあり、勇気づけられました。また、佐野先生のお話もとても納得の内容でした。今回のように年度の終わりにこのような研修に参加出来てとても良かったです。

〇今年度「特別支援コーディネーター」を拝命し、研修等も受講しましたが、内容は「特別支援学校との連携」「どの支援学校がどの地域担当か」「どういった地域支援をしているか」などで、「校内でどう連携していくか、何をどうコーディネートしていくか」といった内容ではありませんでした。校内でSCやSSWの先生と連携を取りつつ、「いったい特別支援Cとはどのような仕事なのだろうか、これでいいのだろうか」と疑問に思う部分は多々ありました。センター等の研修内容、特別支援子＾ディネーターの役割・あり方なども考えて頂ければと思っております。

〇石原先生の最後のいのちの授業の後の、生徒の話など深く考えたい事（教師の皆様にも考えてもらいたい事）でした。

〇完全にアウェーである私がチームの中にいる意味を考える2年目でしたので、講師の先生方だけでなく、ご参加の先生方のお話がとても刺激になりました。視座が広がりました。ありがとうございました。

カウンセラーの視点からの講演に多くのことを学ぶことができました。（※回答が大変遅くなり申し訳ございませんでした。）

〇石原先生のお話はＳＣ立場でのお話で現場関係としては、申し訳ない気持ちになりました。学校とすれば、職員とＳＣの立場や有効性などを十分に理解し、来ていただくことが、当たり前でなく、ありがたいと思って、チームで体制づくりをしなければいけないと感じました。本人の困り感や悩み、家族へのフォローも学校として、ＳＣの力を借りながら進めていきたいです。

〇佐野先生の話は、理にかなっており、自分の頭の中にある考えをすっきりまとめてくださりました。

〇誰が、何に、どのように困っているかを整理し、それぞれの困り感をすべて大切に扱ったうえで、最も優先すべき困り感をどう軽減していくかを、関係者すべてで対等に対話できるような、ケース会議が理想だと思っています。教員や、スクールカウンセラーの困り感も出し合え、共感しあえるような関係を作ることができたらと思いました。

〇ZOOMの操作に慣れておらず、数分遅刻して入室したり画面が変わってしまったり早めに退出してしまったりいろいろあったが、内容は気づかされることが多くお伺いしてよかった。石原先生・佐野先生どちらのお話も先進的で参考になるものであった。

〇参加者数はわかったが、どなたが参加されているかメンバー全体が不明だったので、発言しにくかった。リモートでなければ、会場の雰囲気等を感じ取りながら発言すべき内容を考えられる。その点がリモートの難しさ？

〇憶測に過ぎませんが、オンライン形式は気軽に参加できるメリットがあるため、「顔出し」なしを想定して参加を希望する人もいるでしょう。よって顔出し前提だと参加者が減るかも知れない、と思いました（実際、参加希望しつつ入室して去った方や、後半は退室した方がいましたね）。